

# デュッセルドルフ日本人学校における実践

前デュッセルドルフ日本人学校 教諭

熊本県球磨郡多良木町立黒肥地小学校 教諭 岡部 順 升

**キーワード：現地理解、外国語活動、異文化体験、国際交流**

## 1. はじめに

念願の在外教育施設派遣が叶い、ドイツ連邦共和国デュッセルドルフ日本人学校に勤務することができた。3年の在任期間ではあったが、その大変貴重な経験を積むことができた。ささやかではあるが、教育実践を紹介したい。

## 2. 現地の教育事情等について

本校では、小学校低学年ではドイツ語週1.5時間、中学年以上は、ドイツ語・英語週3時間が設定されている。授業形態はT1をネイティブ、T2を日本語が話せる現地採用職員である。また、編入学当初は、ドイツ語の通常授業についていくことが困難なため、編入時の1学期間は、毎週1回、1単位時間のドイツ語補習を放課後に受講することが義務付けられている。

### (1) 保護者の要望について

多くの保護者の在任期間は1年～5年程度である。その限られた時間に、現地の文化に触れることや語学の習得、学力の向上を強く要望されている。また、評価アンケートの語学に関する調査項目より、ドイツ語よりも英語を話せるようにしてほしいとの思いが強いことが分かっている。しかし、デュッセルドルフはノルトライン＝ヴェストファーレン州にあり、その州法によってドイツ語の学習時間が義務づけられている。保護者には、現地にある姉妹校との国際交流があること、伝統的な祭りへの参加することなど、ドイツで生活しているからこそ有意義な教育活動ができるということを理解し、家庭でも少しでもドイツ語に触れる機会を増やしてもらうことなどを機会があるごとに啓発している。

### (2) 学習指導要領と英語会話について

本校の小学校3年生からの英語は、リスニングとライティングからなる。文部科学省の学習指導要領では、「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行う」とある。リスニングの学習では、ネイティブによる学習指導のため、大変良い学習環境であると言える。また、ドイツでもハロウィンやイースターなどがあり、かぼちゃをくり抜いて灯りをともす飾りなどを各教室にプレゼントしてくれるなど、外国の文化にも十分触れる機会がある。しかし、ライティングもあり、小学校3年生でローマ字を学習する日本の教育を受けている編入学の子どもにとっては、一気にハードルが高くなる。ただ、慣れてしまえば、小学校在学中に英検3級程度の取得は可能である。中学部であれば、2級程度の取得が可能である。実践を紹介したい。

### (3) 現地の語学における生活レベルについて

デュッセルドルフは日本人が6000人程度住み、日独友好を大切にしてくれる都市であるので、多くのドイツ人は日本人のドイツ語レベルを理解している。ドイツの中での生活水準レベルが非常に高い地域のため、英語を話せるドイツ人が多く、英語での日常会話が可能となる。また、レストランや観光案内書では英語表記があり、英語が話せれば困ることは殆どない。

### (4) ドイツ人の好むスポーツについて

ドイツの代表的なスポーツと言えばサッカーである。ここデュッセルドルフには、ブンデスリーガ2部（私の

派遣初年度は1部)所属のプロサッカーチームFortuna Düsseldorf(フォルトゥナデュッセルドルフ)があり、試合のある日は、チームのマフラーを巻いて自転車に乗って観戦に行くファンや酒場、地下鉄のホームなどで応援歌を歌うファンの姿が至る所でみられる。チケットも毎回3万枚が売れることからサッカー熱が高いことが分かる。また、車で1時間圏内にメンヒェングラートバッハ(ブンデスリーガ1部)、レヴァークーゼン(ブンデスリーガ1部)もあり、公園では家族でサッカーを楽しむ姿もよく見られる。

### 3. 諸実践

#### (1) 地元サッカーチーム「フォルトゥナデュッセルドルフ」との交流—小学部2年生の実践—

設定した理由は、毎年生活科の学習単元で公共交通機関を利用してスタジアム見学に行っているということと、ドイツ国内のプロチームで唯一日本人スタッフが在籍していることである。

今回は、地元チームを応援することを通して、デュッセルドルフで生活することを楽しむ意欲を高めたいとのねらいをもって学習活動を進めることにした。日本人スタッフは、日本人のいないチームだがデュッセルドルフに住むからこそ、地元チームを応援することを通して子どもたちがドイツを理解するという学習は日独友好の懸け橋になると考え、フォルトゥナ側や地元メディアに働きかけ、スタジアム見学をこれまで以上に充実していくことを約束してくれた。

(ア) 単元名「エスプリアリーナへ行こう」

(イ) 学習指導要領との関連

内容(3)自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。

1	2・3	4~7	8(本時)	9	10~14	15
オリエンテーション	フォルトゥナHPを見たり、選手カルタを作りながら選手の顔と名前を覚える。	・選手カルタで遊ぶ。 ・似顔絵を描く	選手へのプレゼントを考える。	ゲストティーチャーの講話からサッカーチームF95やエスプリアリーナの施設、働く人に興味をもつ。	取り組みたい課題ごとにグループを作る。 ・選手の似顔絵作り ・応援CM作り ・メッセージカード作り、折り紙など ※ドイツ語講師の招聘1時間(ドイツ語の言い回しなど)	・作成した物(似顔絵・ポスター・DVD)を届ける。 ・施設見学をする。
	16	17	18			
	ゲストティーチャーへのお礼の手紙を書く。	ゲストティーチャーや選手の感想を聞く。	学習のまとめをする			

図1 指導計画



図2 選手カード

(ウ) 指導過程

まず、自分たちの住むデュッセルドルフにプロサッカーチームがあることに興味を湧くように、ホームページ上で選手を調べる学習活動を行った。

次に、選手カード(図2)切り取り、裏面にドイツ語で書かれた選手名を貼る活動を行った。それを「選手カルタ」と呼び、カルタ遊びを行った。選手名はドイツ語なので、ドイツ語科の先生にカタカナ表記をお願いした。カルタ遊びの方法は、

教師が選手名を言うときは、顔写真を表にしてグループ対抗で行った。また、拡大した顔写真で問題を出す時には、裏側のドイツ語で書かれた選手名を表にしてグループ対抗で行った。さらに、廊下に選手の写真を掲示し、子どもがいつでもドイツ語を読み、選手を覚えられるように工夫した。

選手の顔と名前がほぼ一致できるようになったころ、フォルトゥナジャパンディスクの日本人スタッフによるオリエンテーションをしてもらった。内容は、地元でブンデスリーガ1部昇格を目指してがんばっている選手たちについての紹介と、スタジアムの中にはどんな施設・設備があるのかである。その際に、子どもたちがエスプリアーナへ見学に行く際に、似顔絵を持ってきてほしいとの宿題を出してもらった。似顔絵の規格は、A4の横で、左側に選手の顔写真入りのサインカード、右側に子どもたちがドイツ語で名前書くところと似顔絵を描くところがある。

スタッフより、試合前の練習中に選手に会えるかもしれないとの話も聞いたので、子どもたちは、選手に会いたい、応援している気持ちを届けたいとの思いが一気に高まっていた。

その高まりをスタジアム見学への意欲につなげていけるように、「選手に思いを届けるプレゼントづくりをしよう」と話してみた。子どもたちが考えたプレゼントの内容は、ドイツ語で書いたポスター、折鶴、仕掛けカードなどである。更に、フォルトゥナ応援CMも製作することにも取り組んだ。CM作りは教師側からの提案だったが、内容を子どもたちが考えることで活動を進めることを確認した。その間、ジャパンディスクスタッフとコンタクトを取り、チームの応援歌を教えて欲しいとお願いした。ジャパンディスクのスタッフの方は快諾され、8種類のドイツ語の応援歌（歌詞とカタカナの読み付き）を添付ファイルにて送ってくださった。また、YouTubeで応援歌のサイトのURLも教えていただいた。

CMはビデオで撮りDVDに保存して届けることにした。地元テレビ局の取材が入るため、個人情報の公開に関して保護者からの同意書を取り、また、テレビ局側へもドイツ語で翻訳した学校からの承諾書を送り見学の当日を迎えた。

アリーナ見学では、まずインタビュールームに入り、テレビ局の取材を受けた。その後、選手がプレーするピッチに行き、選手が試合中に座るベンチに座り施設の集客人数等についての説明を受けた。また、VIPルームに入り、VIPシートに座ってフォルトゥナデュッセルドルフの応援歌を歌った。約53,000人入るスタジアムで僅か64名の児童の声だったが、よく響き渡り、監督が部屋から出てきて手を振ってくれる姿が見られた。最後は、選手のロッカールームを見学させてもらい、その部屋で昼食を食べた。子どもたちが用意したプレゼントは全てジャパンディスクのスタッフに渡した。帰りの地下鉄Uバーンの中で子どもたちがフォルトゥナデュッセルドルフの応援歌を歌っていると、乗っていたドイツ人の大人たちも一緒に歌ってくれた。子どもたちは自分たちのドイツ語の歌がデュッセルドルフの人たちに通じたことがとても嬉しかったようであった。また、応援歌を口笛で吹いているドイツ人もいて、「先生、フォルトゥナの歌の口笛です」と教えてくれる子どもたちもいた。

見学終了後に、お礼の手紙にジャパンディスクのスタッフ方の似顔絵を添えて渡した。数日後、選手が子どもたちからのプレゼントに喜ぶ写真を5枚届けてくださった。子どもたちは大喜びで、「僕の描いた似顔絵を〇〇選手が写真を撮っている」、「監督が僕たちの作ったプレゼントを首飾りにして写真に写ってくれている」など嬉しそうに話してくれた。テレビ局のセンターTVの放送では、地元チームを応援する日本の子どもたちとのタイトルで放映された。子どもたちがドイツ語で応援歌を会場に響き渡る声で歌っていたことがフォルトゥナのスタッフの心を惹きつけ、お礼として日本人学校の児童と家族へ無料チケットをプレゼントしてくれた。みんなは、試合当日はフォルトゥナのユニフォームを着て、地元ファンに交じってフォルトゥナの歌を歌う姿も見られた。サッカーを楽しむことが、デュッセルドルフで暮らすことを好きになるとの所期の目的が達成された瞬間だった。

〈子どもの感想〉

- ・自分たちが作ったプレゼントを選手が喜んでくれているのが分かって嬉しかった。
- ・初めサッカーは知らないスポーツでしたが、フォルトゥナの試合の応援に行こうと思います。
- ・ドイツ語の応援歌を歌えるようになったので試合観戦のときに一緒に歌います。
- ・選手の練習を見に行くと、選手の名前を呼んでサインをしてもらいます。

## (2) オーバーカッセル地区のカーニバル参加

ドイツでは、2月にローゼンモンタークという休日があり、その日は春の訪れを告げる「カーニバル」が各地

で催される。その前日に、各地区で小さなカーニバルが催される。小さいと言えども、道の両側には仮装した人たち（子どもから大人まで）がひしめき合っている。パレードに参加する団体も仮装し、「ヘラウ！」と言ってお菓子を投げる。観に来ている人たちも大きな声で「ヘラウ！」と応える。デュッセルドルフはオーバーカッセル地区にあるので、オーバーカッセル地区のカーニバルに参加する。小学部2年生が毎年参加している。縁あって担任として2回、息子の保護者として1回の計3回参加した。つまり、3年連続の参加である。大きな山車も出て、大きなお祭りが始まる。約4kmを2時間程度かけて歩き、パレードは終わる。自分たちのかけ声に声を返してくれることや投げるお菓子を受け取ってくれる瞬間に喜びを感じる。参加した子ども・保護者は参加できたことを心から喜んでいた。

〈子どもの感想〉

- ・ぼくが「ヘラウ」と言ったとき、ドイツ人の大人も子どもも「ヘラウ」と言ってもらえてうれしかった。
- ・いろんな人が仮装して行進するので、楽しかった。
- ・観に来てくれる人も仮装して歩いていて楽しかった。

#### 4. おわりに

この3年間は、公私ともに新鮮で発見の連続であった。私的な面では、近くを流れるライン川の畔を家族で犬を連れて散歩を楽しむデュッセルドルフの人たち。また、その横を楽しそうにサイクリングをするデュッセルドルフの人たちやジョギングをする人たち。ライン川の流れるように自由に生きるその生き方に、人生は、自分らしく楽しむのだと私自身思えるようになった。ライン川に架かる長さ1kmを越える橋「オーバーカッセルブリュッケ」を渡ると見えてくる旧市街（アルトシュタット）では毎回新鮮な発見があった。行列のできるパン屋でパンを買う時にも、自分より頭一つ以上出たドイツ人に交じって行列に並び、自分の注文を言うまでに、買いたいパンをドイツ人は何と発音するのか。ドキドキしながら周囲の言葉に耳を傾けていたことを覚えている。この3年間のうちに、デュッセルドルフ日本人学校と交流のあるルクセンブルクの合唱団の女性をホストファミリーとして自宅に泊め、片言のドイツ語と英語でコミュニケーションをとったこともあった。また、息子の交換留学でドイツ人の子どもを自宅に泊めたこともあった。「もっとドイツ語を勉強し、ドイツ人と仲良くしたい」との思いを持ちながら、語学の勉強までにはたどり着けない毎日であった。

仕事の面では、日本人学校に来た子どもたち、日本人学校に在籍している子どもたちにデュッセルドルフで暮らすことを楽しんで欲しい。本帰国した際には、ドイツで過ごした思い出と学力に自信をもって帰国して欲しいとの一心でデュッセルドルフ日本人学校に努めてきた。あつと言う間に過ぎた3年間だった。その間に、保護者に信頼されるデュッセルドルフ日本人学校を目指して助け合い支え合った同期の仲間には感謝の言葉が付きない。帰国するときは、自分がお世話をした人に、逆にお世話になりながら帰国するのだが、最後の最後までお世話になってしまい、本当に感謝の気持ちは尽きない。ここに行けたから経験できたこと、ここに行けたから出会えた素敵な方々、環境が変わることの新鮮な喜びは自分・家族にとって本当によい経験であった。言葉は通じなくても心を察してくれるドイツ人の温かさにも感謝が尽きない。また行きたい。

Vielen Dank. Alles Gute ! Labe in Düsseldorf